

聖書：使徒 18：18～28

説教題：プリスキラとアクラとアポロ

日時：2014年5月18日

使徒の働きに記されているパウロの3回の世界伝道旅行はそれぞれどこから始まるか、皆さんは聖書を開いて示せるでしょうか。第1回目はそんなに難しくありません。13章から始まり、14章の最後の部分で終わります。そして15章でエルサレム会議の様子が記された後、15章36節から第2回伝道旅行が記されます。難しいのはその後。第2回伝道旅行はどこで終わり、どこから第3回伝道旅行が始まるのか。実はそれが今日の箇所の中に両方あります。18章22節で第2回伝道旅行が終わり、次の23節から第3回伝道旅行がスタートします。あまりにもあっさり書いてあるので、思わず見落としてしまいそうなほどです。なぜこんなそっけない書き方になっているのか。その一つの見方は、この書の著者ルカはこの旅に同行していなかったもので、詳しく書けなかったというものです。しかしより妥当な見方は、ルカは前回のコリント伝道に続いてエペソ伝道を記すことに主眼を置いていたからというものです。パウロが第2次伝道旅行でエペソを目指そうとしましたが、16章6節にあったように、アジアでみこそばを語ることを聖霊によって禁じられたため、マケドニアでの宣教へと導かれました。しかしついにそのエペソへパウロは進もうとします。彼はエルサレムに帰らなければならない用事があったため、その帰りにエペソに一寸立ち寄り、母教会に戻って後、またエペソへ戻ります。そのようにルカはコリント伝道に続いてエペソ伝道を記すことに重きを置いているため、第2次伝道旅行の終わりとは第3次伝道旅行のスタートは比較的あっさり記されているのでしょう。

本文に注目して行きますが、まず記されているのはコリント宣教の終わりについてです。18節に「パウロは、なお長らく滞在してから」とあります。前回、ローマ総督ガリオの判断について見ましたが、この結果、パウロは妨げられることなく宣教できるようになりました。そのため、長らくコリントで宣教しました。その働きを終えてシリアへ、すなわち母教会のアンテオケ教会への帰途に就きます。パウロはケンクレヤに移動した時、一つの誓願を立てていたので髪を剃ったと記されています。これは民数記6章に記されているナジル人の誓願であると思われます。このことから私たちは改めてパウロはコリント滞在時に特別な思いで過ごしていたことを知るのです。前回見た通り、コリントに入って来た時のパウロは弱く、恐れおののいていました。そんな彼に主が幻の中で語りかけ、「誰もあなたを襲って危害を加える者はないから、恐れなくて語り続けなさい」と語られました。おそらくその御言葉を頂いたこととの関連で、パウロはこの誓願を立てていたのでしょう。すなわち主の守りに対する心からの信頼と感謝を表し、また主に自分を全く明け渡す献身を表していた。パウロとしてはやはり特別に苦しい中であつたのです。ともすれば気落ちし、動けなくなりそうな状況の中で、必死に戦う毎日だったのです。しかしこうしてコリント宣教を終える際、パウロは神のこれまでの守りを心から感謝して、このナジル人の誓願を終えて髪を剃ったのです。彼はどれほど主に感謝してこの儀式を行なったことでしょうか。

さてパウロはエルサレムへの帰途に就きますが、途中、エーゲ海の対岸の町エペソに立ち寄ります。この時、プリスキラとアクラも同行します。彼らもエペソで事業を展開する予定があ

ったのでしょう。パウロはやがて本格的な宣教活動を行なう前の様子見として、この町の会堂へ入って行きます。そしてそこで良い反応を得ます。ユダヤ人たちはもっと長くどどまってくれるように頼み、パウロは「神の御心なら、またあなたがたのところに帰って来ます」と言って別れ、船出して、カイザリヤへと着きます。そしてエルサレムに上り、教会に挨拶して後、母教会のシリアのアンテオケへと下って行きます。彼は送り出してくれた人々に報告し、交わりの時を持ったのでしょう。そうして23節から第3次伝道旅行に出発します。目的地はエペソです。その道すがら、途中にあるガラテヤ地方、フルギヤ地方の教会をフォローアップしながら、エペソへと向かって行ったのです。

さて、パウロのエペソ入りは19章に記されます。今日の残りの部分では、パウロがエペソに入る前のこの町の状況が記されています。まず記されているのは、アポロによる宣教です。アポロは北エジプトのアレキサンドリヤ出身でした。アレキサンドリヤは当時、ローマに次ぐ世界第二の都市で、学問の町として有名でした。70人訳聖書が作られたのもこの町でした。またフィロンという哲学者もこの町の出身でした。このアポロについて24節に「雄弁な」と言われています。そこには印が付いていて、欄外には「学識のある」とあります。おそらくこのアポロも学問的気風に溢れる町アレキサンドリヤでしっかり教育を受けた人だったのでしょう。その彼がエペソにやって来て会堂で大胆に話し始めたのです。

これを見た時のプリスキラとアクラはどんなに驚いたことでしょうか。パウロが離れて行ってしまい、心細く思っていたある安息日に会堂に行くと、一人のユダヤ人教師が力強く宣教しています。良く聖書に通じている人です。霊に燃えて語っています。イエスのことを正確に語っています。何と頼もしい助っ人が来てくれたことか、と彼らは互いに顔を見合わせて喜んだことでしょう。しかし間もなく彼らは、アポロの説教には何かが足りないということに気がきます。すなわち彼はどうやらヨハネのバプテスマしか知らないということです。ご存知の通り、ヨハネのバプテスマは真のメシヤなるイエス様のバプテスマに備えさせるものです。しかしアポロはそのイエス様のバプテスマ、すなわちペンテコステの日に成就した聖霊降臨というバプテスマを知らないようでした。彼は「イエスのことを正確に語り」と言われていますから、イエス様の地上の生涯の働きのある部分までは知っていたのでしょう。しかしイエス様の十字架、復活、昇天、そしてペンテコステの日の聖霊の注ぎについては知らなかった。彼の話は良いところまでは行くが、神の決定的なみわざが述べられていないことに、この夫婦は気づいたのです。その時、彼らはどうしたのでしょうか。プリスキラとアクラ夫妻から三つのことを学びます。

一つ目は彼らはアポロを家に招き入れて、神の道をもっと正確に彼に説明したことです。もし私たちが彼らの立場にあつたらどうでしょう。最悪なのは次の二つです。一つは公衆の面前でアポロの足りない点をバーンと指摘することです。「アポロさん。あなたが言っていることは確かに間違っておらず、素晴らしい学識を反映しているようですが、何かが足りませんね。肝心かなめのイエス様の十字架と復活と聖霊はどこに行ったのでしょうか。」もしそのようにやってしまったら、アポロは面目丸つぶれとなり、人々の信用を失ってしまうでしょう。もう一つの方法は、アポロに直接語らず、陰でヒソヒソやることです。「アポロさんはあんなに色々語っているけれど、実はあれでは不十分なのですよ。」と周りの人々に囁くことです。し

かしこの夫婦はそうはしませんでした。彼らはアポロを自宅に招き入れて、プライベートに彼に説明しました。そして彼がさらに主のためにより良く働き、用いられるためにサポートしたのです。この夫婦の姿を見て思い起こすのは、この彼らを映し出すようなクリスチャン夫婦が私たちの時代にもいるということです。私自身も献身を考えていた頃、また神学生の頃、同じように家に招いてくださった方々がいました。足りないところだらけの者を夕食などに招いて、励ましてくださる雰囲気の中でご自分の考えを分かち合ってくださいたり、本をプレゼントしてくれたり、一緒に祈る中でメッセージを語ってくれました。投資しがいのないような者なのに、主の御国のために投資していただきました。まさにそのような奉仕をプリスキラとアクラは行なったのです。

二つ目に学ぶのは、この夫婦の絶妙なチームプレイです。果たしてこの二人はどちらが夫でどちらが妻でしょうか。答えはアクラが夫でプリスキラが妻です。2節にそう記されています。そしてそこでは夫、妻の順番で記されていますが、その後の18節や26節では妻の方が最初に記されています。それはたぶんプリスキラの方が賜物があり、有用な働き人だったからでしょう。このように奥さんの方が優れているクリスチャン夫婦は多いものです。しかし注目すべきは、だからと言ってプリスキラは上に立って指導したり、その場を仕切ったりしていないということです。先に要点を申し上げれば、彼女は女性としての立場あるいは妻としての立場に関する神の御心を良く受け止めて、それにふさわしい仕方で立派な奉仕をしているということです。1コリント14章34～35節：「教会では、妻たちは黙っていなさい。…もし何かを学びたいければ、家で自分の夫に尋ねなさい。」1テモテ2章12節：「私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません。ただ、静かにしていなさい。」もちろん聖書が述べているように、女性が年若い女性に教えること、あるいは子どもたちに教えることは勧められます。では女性は賜物があってもあまり活躍できないのか。そうではありません。ここに立派にやっている人がいます。プリスキラは公にではなく、家に招いて行なっています。ですから教職でなくても、このような教える働きができるということです。また家に招いた時も彼女は夫アクラとペアでこのことをしました。すなわち家庭のかしらであるアクラの権威をつぶすことなく、これを行ないました。聖書には多くの女性たちの働きが記されています。そしてそのいずれからも学ぶことは、彼女たちは自分たちの立場を良く受け止めながら、素晴らしい働きをしているということです。その実例をここにも見るのです。

三つ目に見ることは、このプリスキラとアクラの働きはどう用いられたかということです。27～28節を見ると、アポロはこの後、アカヤに渡って行き、そこで大きな働きをします。すでに信者になっていた人々を大いに助け、聖書によってイエスがキリストであることを証明して、力強く、公然とユダヤ人々を論破しました。彼のこの地方での働きがいかに大きかったかはコリント書を見ると分かります。1コリント3章6節：「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。」この言葉だけでもアポロがいかにコリントの信者たちのために偉大な働きをしたかが分かります。実にプリスキラとアクラが行なった投資は、こうして福音がさらに力強く世界で宣教されることのために用いられたのです。

考えてみるべきは、このプリスキラとアクラは、18章2節に記されていたように、ローマからの退去命令によってこの地に来ていたということです。彼らにとってこの時は困難な時で

した。思わぬ災いが降りかかっていた時期でした。しかし彼らは自己憐憫に陥って時を過ごしていたのではなく、かえってこの時を主により良く仕えるために用いました。彼らはコリントでパウロを支え、エペソでも有用な働きをしました。I コリント 16 章 19 節：「アクラとプリスカ、また彼らの家の教会が主にあって心から、あなたがたによろしくと言っています。」ローマ 16 章 3～5 節：「プリスカとアクラによろしく・・・またその家の教会によろしく」彼らはどこに行っても、主のために歩んでいた夫婦であったことが分かります。

私たちが今、困難の中にあるかもしれません。不運な、あるいは不本意な時期を過ごしていると思われる中にあるかもしれません。しかしそれをただ嘆いて過ごすだけなら、それだけの生活です。しかしプリスキラとアクラから学ぶことは、そのただ中でも私たちは主に仕え、用いて頂くことができるということです。彼らのように、教職でなくても福音のために仕えることはできます。また他の器を見出し、その人の将来に投資することによってもより良く福音のために仕えることができます。また自分が発揮できるユニークな立場を用いて（プリスキラとアクラは夫婦というチームをうまく用いましたが）福音のために仕えることができます。主はそのような私たちの奉仕を、ご自身の御国のさらなる発展と完成のために豊かに用いてくださるのです。